



金融改革という神話

The Myth of Financial Reform

2008年9月15日、米国の投資銀行リーマン・ブラザーズが破綻した。その後、世界は次々と金融危機に見舞われ、多くの国や企業・個人に影響を及ぼした。あれから5年、あの世界を震撼させたリーマン・ショックも、もう遠い過去の記憶のようだ。恐慌からも抜け出し、経済も回復しつつある。米国のメガバンクは記録的な利益をたたき出し、AIGやファニー・メイ、フレディ・マックのように救済された企業も政府に返済できるまで立ち直ってきた。

しかし重要な事実が忘れられている。私たちの生活はウォールストリートのシステムのなかに取り込まれ、米国経済の金融化が着々と進んでいるのだ。メガバンクはリーマン・ショック前よりも大きくなり影響力も増している。米国経済全体に占める金融界の割合も高くなっている。

果たして我々の貯金は5年前より安全に保護されているのだろうか。再びあのような危機が起こらないように金融界は再編されたのだろうか。これに対する明快な答えはまだない。銀行業はこれまでも増して複雑でグローバルになっている。米国の金融機関は増資をし、リスクを減らす努力はしているが、いまだに世界中で高リスクのデリバティブ（金融派生商品）を扱うことができる。

政府は企業への緊急救済措置では見事な手腕を発揮したが、その後がまずかった。銀行の強引なロビー活動に屈し、金融改革案を骨抜きにされてしまったからだ。そこで再び金融危機が起こらないようにするための5つの改革案をここに提案する。

その1：「大きすぎて潰せない」銀行を改革せよ

簡素な銀行ほど安全な銀行だといえる。そのためには銀行の巨大化・複雑化を止めなければならない。そこでいわゆるボルカールールを徹底してはどうか。政府が保証する一般の融資とリスクの高い金融商品の間に壁を設けるのだ。

その2：レバレッジに上限を設けよ

銀行は企業規模を拡大するときによくレバレッジを活用する。他人資本を活用するレバレッジは成功すれば利益率は高まるが、リスクも非常に高い。そのため上限を設ける必要がある。

その3：「金融界の大量破壊兵器」を開示せよ

ウォーレン・バフェットはかつてデリバティブのことを「金融界の大量破壊兵器」だと例えた。金融危機以降、改善はされてきたが、まだ抜け道は多い。国境を越えた取引など修正すべき点はまだある。

その4：シャドバンキングを透明化せよ

銀行以外の金融機関が行なう金融仲介業務にも改革を進める必要がある。

その5：原点をもう一度思い出せ

銀行業とは実体経済を支えるために存在するのであり、決してその逆であってはならない。しかし現実には米国経済の金融化が進んでいる。実体経済、特に中小企業に融資する銀行が必要なのだ。